京都の寺院を歩く

後藤　千鶴

はじめに

平成16年12月12日に「第1回京都・観光文化検定試験」（通称：京都検定）が実施された。ご当地検定ブームの火付け役となった。京都府からは勿論のこと、遠くは北海道からも受験者がいた。受験者数9801人中3676人が合格した。

この検定が実施されるようになったことで改めて京都の魅力を知る機会が与えられたと思う。その魅力ある京都のことを以前から調べまとめていた。その中からいくつかの寺院について記載していく。

清水寺

北法相宗の総本山で山号は音羽山であり、世界遺産として登録され、本尊は十一面千手観音である。780年に坂上田村麻呂が夫人とともに千手観音を造り、堂庵を建てたのが始まりと伝えられている。延暦寺との抗争の度に攻撃を受けた。現在の本堂（写真1）は再建で国宝になっている。「清水の舞台」として有名である。本尊の正面に当たるため、願掛けで飛び降りた人もいたが、その中には生存者もいた。舞台のテラスは創建当時からあったのではなく、あまりに舞台から飛び降りる人が多かったので、その対策として後世に作られたものである。

写真1　清水寺本堂

観光客が多い寺院としても有名だが、開門時間の早朝6時頃は非常にひっそりとしていて等身大の清水寺が伺える。長蛇の列が出来る「音羽の滝」（写真2）の水音が本堂からも聞こえる。そこには地元の人が、自作の水入れの道具でタンクに水を入れている姿もある。

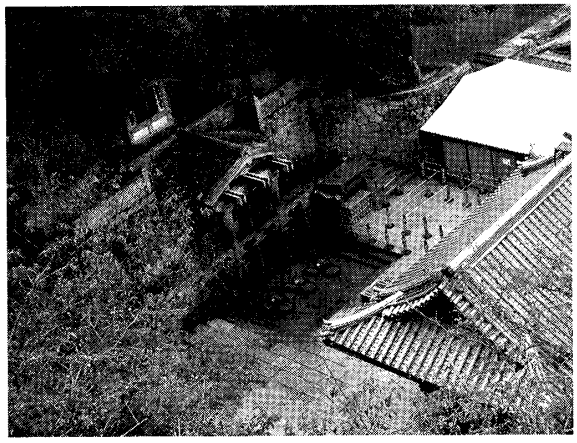

写真2　清水寺音羽の滝

永観堂

浄土宗西山禅林寺派の総本山で山号は聖衆来

迎山であり、本尊は阿弥陀如来である。阿弥陀堂へは御影堂から入る。廊下の突き当たり左側の階段はその形から臥龍廊と呼ばれる(写真３)。

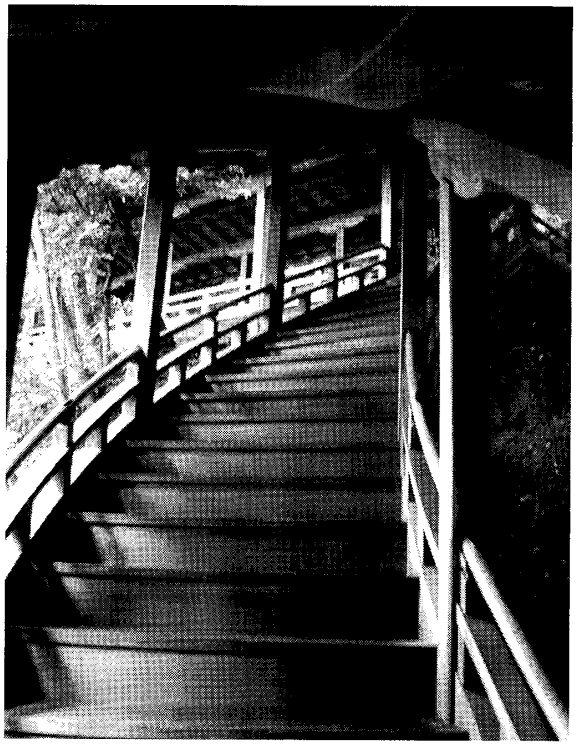

写真３　永観堂臥龍廊

手前には松があり、葉が長く３本にわかれているため「三鈷の松」と呼ばれる。これを持つと３つの福が来ると言われている。その松は庭にあり拝観通路の廊下から降りて拾おうとする人がいるため現在は境内売店に置いてあり無料で持ち帰ることができる。

本尊の阿弥陀如来立像（重要文化財）は、永観が念仏の行道中に現われ振り向いて「永観、おそし」と言葉を発し導いた姿から「みかえり阿弥陀」と呼ばれる。テレビや本で見て思っていたものよりやや小さく感じる。正面からだけではなく振り返った横からも拝観が可能で横から拝観する方が近寄れる。

青蓮院

本尊は熾盛光如来で粟田御所ともいう。平安初期の比叡山の青蓮房が始まりで、天台宗三門の一つである。熾盛光如来を本尊とするのは青連院だけである。

本尊は曼荼羅で豊臣秀吉によって奉納され、2005年に創建以来初めて一般公開された。色の塗りなおしは一切していないが当時の姿そのままに残っている。バックの群青の美しさに驚かずにはいられない。

庭園は龍心池を中心とした池庭で跨龍橋と呼ばれる石橋が架かり、洗心滝が配されている。豊臣秀吉寄進の一文字型手水鉢は有名で、書院の北東部側にはキリシマツツジを中心をした堀遠州作の霧島の庭がある。門前には巨大なクスノキがある。

修学院離宮

後水尾上皇が造営した広大な山荘で参拝するには事前予約が必要である。自由散策ではなく職員案内によりグループにて散策する。御幸門を通り寿月観の先に総本山が見える。その奥にうっすらと比叡山を見ることができる（写真４)。現在、付近には個人所有の畑がある。

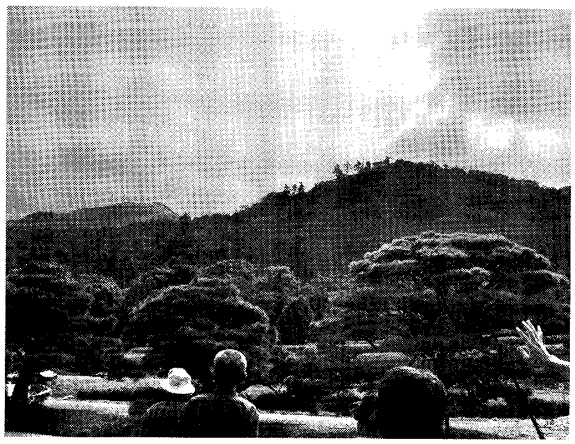

写真４　修学院離宮総本山と比叡山

松並木を抜けると中離宮がある。中離宮の鯉の絵（写真５）は夜になると飛び出してきて目の前の池で泳ぐという伝説がある。そのため、この絵の上から網の絵が描かれているという。その網の絵が所々破けていて、遊び心が伺える。

写真５　修学院離宮中離宮の鯉の絵

高台にある隣雲亭からは、比叡山から流れ出る音羽川の渓流を引いた浴龍池（写真 6）が見え、修学院離宮を代表する絶景となっている。

写真６　修学院離宮浴流池

法観寺

臨済宗建仁寺派で山号は霊応山で本尊は五智如来である。八坂の塔の名で知られている。聖徳太子が五重塔（写真７）を建て、その中に仏舎利を納めて法観寺と号したと伝わる。1179年の清水寺衆徒と祇園神人の争いにて焼失したが、源頼朝、足利義教によって再建された。

五重塔は内陣二層目まで拝観可能である。一層目の装飾はかなり色彩が残っている。また、心柱を近くで見ることができる。二層目からは京都市内が見える。

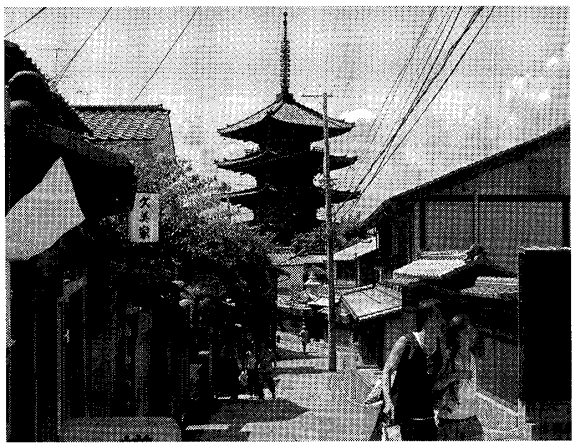

写真７　法観寺五重塔

おわりに

京都検定が実施されるようになり京都の人はそれを実際はどう思っているのだろうか。答えは「ええおすなぁ」である。これは「素敵なことおす」ではなくて「どおでもよろしおす」という意味にあたる。自分たちの住む京の町を知って貰えるのは素直に嬉しいが、京都検定保持者だからといって「それで？」といった具合だ。だからといって、この資格が意味のないものだとは私は思わない。京都を「学問する」という意味では目安になるし、京都というブランド力が一層強化されたように思う。

京都の寺院には奈良とは違った魅力が詰まっている。その魅力は現地でこそ味わえると思う。京都検定がきっかけとなり多くの人が何度も何度も京都を訪ねてくれたらいいと思う。

参考文献

2005『京都・観光文化検定試験公式テキストブック』淡交社

2005『第１回京都検定問題と開設』京都新聞出版センター

写真

すべて筆者撮影